

外務専門職
基本書マスター講義
経済学

無料体験入学用レジュメ

<序章> 経済学の論理と方法

1. 身近な経済活動と市場経済

- ・ コンビニエンスストアでおにぎりを買って食べる。
=財
 - ・ Wセミナーに来るために電車に乗る。
=(輸送)サービス
- 消費

- ・ マクドナルドでアルバイトをして、ハンバーガーを作る。
=生産者・企業 =労働供給 =財
 - ・ 家庭教師をして、中学生に英語を教える。
=生産者・企業 or 労働供給 =(教育)サービス
- 生産

* (広義の)財=経済活動で取引の対象となるもの

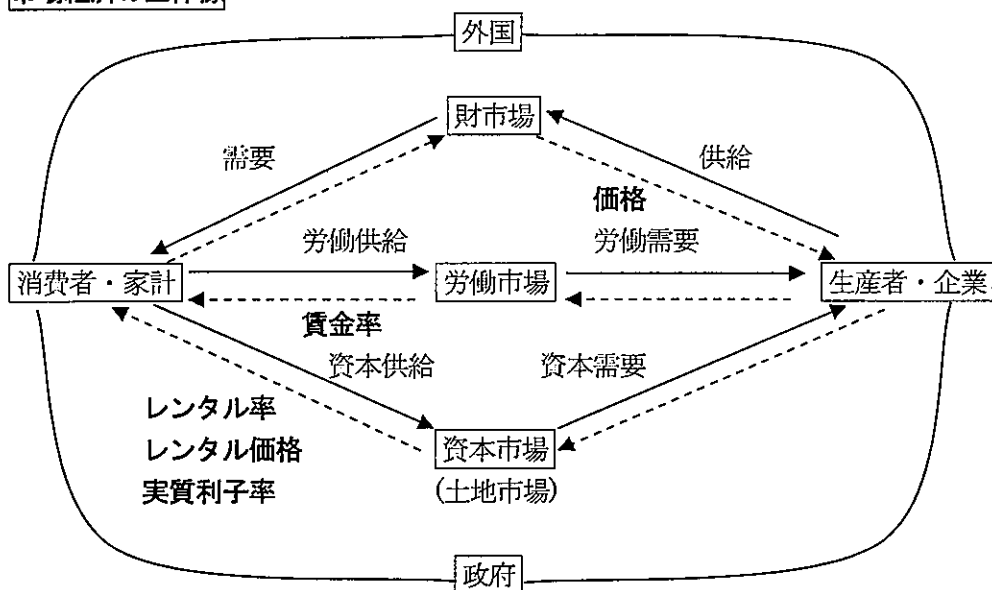
- ・ (狭義の)財=物理的な財
- ・ サービス=非物理的な財

※経済学では(狭義の)財とサービスを明確に区別しない。

→経済活動は**市場経済**の中で行われる。

- ・ **市場**=財・サービスの取引がなされる具体的な場所または抽象的な場所
- ※市場は無数に存在する。

市場経済の全体像



2. 稀少性と選択

- ・稀少＝財・サービスが人間の欲望を満たすほどに存在しない状態をいう。

※絶対量が少ないという意味ではない。

{ 経済財＝稀少性がある財・サービス ex)時間
自由財＝稀少性がない財・サービス ex)空気

- ・資源(生産要素)＝人間の欲望を満たす財・サービスを生産するための投入物をいう。

{ 本源的生産要素＝労働、土地、自然資源(原油、鉱物、天然ガス etc.)
資本＝過去の生産の結果として存在する建物や機械(資本財)
＝生産活動のための資金(おカネ)

「欲望は無限大←→資源は限られている」

→競合する複数の対象から何に資源を振りわけるか……選択の問題

= 経済学の問題

3. 経済学の定義

- ・経済学

＝稀少な財・資源を競合する目的のために選択・配分する方法を研究する学問

{ ミクロ(微視的)経済学＝個別的な消費者(家計)や生産者(企業)の行動の分析、ある財・サービスの「市場」の分析、「政府の役割」の考察を行う経済学の領域

{ マクロ(巨視的)経済学＝一国の経済全体を、一つの経済システムとして捉え、集計的な変数を用いて経済の運行法則を分析する経済学の領域

4. 経済学の基本問題

何をどれだけ
どのような方法で
誰のためにどれだけ 生産するか

「何をどれだけ」「どのような方法で」……資源配分(allocation)の問題
「誰のためにどれだけ」……所得分配(distribution)の問題
→これらは市場(価格)機構を通じて決定する。

5. 経済主体の合理性

・経済主体の合理性

＝目的が与えられたとき、経済主体はその目的達成に「最適な行動」をとると
いう性質
＝無駄がない、効率的

・目的＝「何かを最大化すること」と仮定する

┌消費者→自己の満足(効用)
└生産者→自己の利潤

6. 実証的分析と規範的分析

・実証的分析＝価値観を含まない純粋に論理的な分析

(客観的) →「現実はどうなっているか、論理的にどうなるか」を分析する。

・規範的分析＝ある価値観を含みどう問題が解決されるべきかを分析

(主観的) →「どうあるべきか」を分析する。

7. 部分均衡分析と一般均衡分析

・部分均衡分析＝一つの市場のみを分析する方法

→単純だが曖昧な分析

・一般均衡分析＝複数(二つ)の市場を同時に分析する方法

→複雑だが厳密な分析

8. 効率性の問題と公正の問題

・資源配分の効率性の問題……実証的問題

ex) 限りある資源(原材料)からどのようにして最大のピザを作るか

・所得分配の公正さの問題……規範的問題

ex) 最大のピザをどのようにして分けるか

9. 経済学の方法

・モデル分析

＝経済活動のモデル(＝模型)を作り、それを使って経済を分析する

- 外生変数＝モデルの外で決まる変数(所与の変数)
- 内生変数＝モデルの中で決まる変数
- 比較静学＝外生変数の変化に対する内生変数の変化の分析

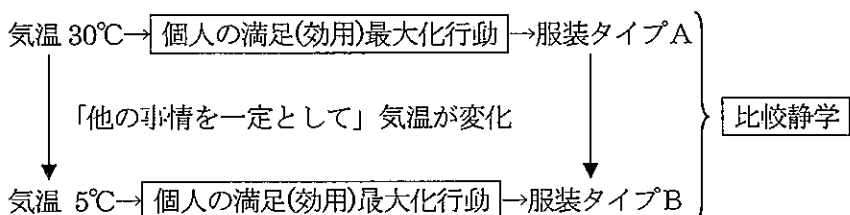
ex)個人が服装を決定するモデル

- ・仮定 ; 個人は「自己の満足(効用)が最大」になる服装を決定する
- ・制約条件 ; 個人が選べる服装のタイプはA～Eの5タイプ

外生変数 … 気温

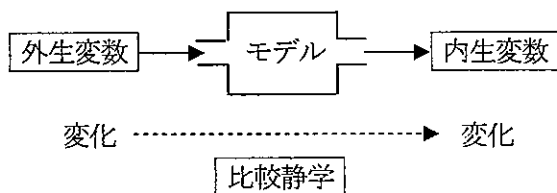
(気温以外の服装に影響を与える要因は無視＝「他の事情は一定とする」)

内生変数 … 服装のタイプ



→このモデル分析により、「気温」と「個人の服装のタイプ」との関係がわかる

<モデル分析のイメージ>



<第1章> 消費者行動理論

・消費者(家計)の行動

＝「財の価格」と「所得」を所与として、「予算制約」の下で、「自己の効用を最大化する」ために、「財の消費量の組合せ」を決定する

・プライス・テイカー(価格受容者)＝価格を所与として行動する経済主体のこと

第1節 効用関数と無差別曲線

1. 効用関数

※関数(function)＝数と数との関係を示すもの

・効用(utility)＝消費者の満足の度合い

・効用関数＝財の量の組合せと効用の大きさとの関係を示す規則

図示

$$U = U(x_1, x_2) \quad \text{<式1-1>}$$

↓ (U：効用, x_1 ：第1財の量, x_2 ：第2財の量)

・効用曲面

<図1-1>

↓ (一方の財(第2財)の量がある水準に固定して垂直に切断する)

・効用曲線＝ある財(第1財)の消費量と効用の大きさとの関係を示す曲線

<図1-2>

- ・ **限界効用** (marginal utility : MU)

＝他の財の量を一定として、ある財の量を追加的に1単位変化させたときの効用の変化分

→効用曲線上のある点における接線の傾きで示される

- ・ **限界効用逓減の法則**

＝財の量を増加させるにつれて限界効用は低下していくという一般的な仮定

※限界効用は低下していくが、ゼロ以下になることはない(常に正の値)と

仮定する＝消費者の選好(preference)に関する**不飽和(単調性)の仮定**

→効用曲線は常に右上がりであり上に凸型あり、水平や右下がりになることはない

2. 無差別曲線

(1) 定義

- ・ **無差別曲線** (indifferent curve)

＝同じ効用をもたらす財の量の組合せの集合

＝効用に差が無い＝無差別

→無差別曲線は効用曲面の「等高線」として示される

<図1-3>

(2) 性質

①「無数に描ける」←完全性(完備性)の仮定

＝あらゆる財の量の組合せが可能で、それぞれの間で効用の大小が比較できること

②「右下がり」←不飽和の仮定

理由

- ・第2財の量が一定の下で第1財の量が増加すると、不飽和の仮定により効用が必ず増加する(<図1-3>点A→点C)。
- ・効用を一定に保つ(＝効用を無差別にする)ためには、第2財の量が減少する必要がある(<図1-3>点C→点A')。

③「右上にある(原点から遠い)ものほど高い効用水準に対応」←不飽和の仮定

④「互いに交わらない」←推移性の仮定＋不飽和の仮定

＝効用の順序付けに矛盾がないこと

証明；背理法

仮定「無差別曲線は互いに交わる」

効用の比較

$$A = C$$

$$C = B$$

$$\Rightarrow A = B$$

しかし、性質③により、 $A < B$

→互いに交わると矛盾が生じる。

∴互いに交わらない

<図1-4>

※背理法

＝命題「Aである(Aではない)」を証明するために、その逆「Aではない(Aである)」を仮定し、その仮定の下では論理的矛盾が生じることをもって、元の命題を証明する方法

- ⑤「原点に対して凸型」←限界代替率の逓減性の仮定
＝限界代替率が逓減すること

<図 1－5>

- ・ 限界代替率(marginal rate of substitution : MRS)
＝ある財(第 1 財)の量を追加的に 1 単位変化させたときに、効用を一定に維持するために変化させるべき他の財(第 2 財)の量
＝第 2 財で測った第 1 財の主観的価値(主観的交換比率)
→無差別曲線上のある点における接線の傾きの絶対値で示される
- ・ 限界代替率逓減の法則
＝同一の無差別曲線上において、一方の財の量が増加するにつれて限界代替率は低下していくという一般的な仮定
- ・ 限界効用と限界代替率の関係

$$MRS = \frac{MU_1}{MU_2} \quad <式 1 - 2>$$

＝無差別曲線上のある点における限界代替率は、その点における第 1 財の限界効用と第 2 財の限界効用との比に等しい

第2節 効用の最大化

1. 予算制約

(1) 予算制約式

$$p_1 \times x_1 + p_2 \times x_2 = I \quad \text{＜式1-3＞}$$

(p_1 : 第1財の価格, p_2 : 第2財の価格, I : 所得)

(2) 予算制約線

＝所得(予算)を使い切った場合の第1財の量と第2財の量との組合せの集合

＜図1-6＞

財の量の組合せ

- ・点A(予算制約線より右上の領域)……予算オーバー
- ・点B(予算制約線上の点)……予算内、予算を使い切っている
- ・点C(予算制約線より左下の領域)……予算内、予算を使い切っていない

⇒**購買可能集合**……予算制約線と各軸で囲まれた領域

＝所与の財の価格と所得の下で選択可能な財の量の組合せの集合

※予算制約線の特徴

- 傾きの大きさの絶対値……**財の価格比、相対価格**
- 横軸切片……所得(予算)すべてを第1財の消費に充てたときの第1財の量
- 縦軸切片……所得(予算)すべてを第2財の消費に充てたときの第2財の量

2. 最適消費計画の決定

・最適消費計画（需要、効用最大化点）

＝予算制約を満たし、かつ、効用を最大化する財の量の組合せ

<図 1－7>

◎最適消費計画＝点E(x_1^* , x_2^*)：予算制約線と無差別曲線との接点

点A……予算を使い切っていない。
 →不飽和の仮定により、余っている所得(予算)を財の消費に充てれば効用をさらに大きくできる(＝効用最大ではない)
 点D……予算オーバー→ 選択不可能
 点B、点C……予算を使い切っているが、点Eより原点に近い無差別曲線上に位置する
 →予算制約の下で効用最大ではない

予算制約線の傾きの絶対値＝財の価格比 $\left(\frac{p_1}{p_2}\right)$
 ||
 点Eにおける無差別曲線の接線の傾きの絶対値＝MRS

$$\Rightarrow MRS = \frac{p_1}{p_2} \quad \text{<式 1－4：効用最大化条件 1>}$$

$$\Rightarrow \frac{MU_1}{p_1} = \frac{MU_2}{p_2} \quad \text{<式 1－5：効用最大化条件 2>}$$

＝加重(貨幣 1 単位あたりの)限界効用均等化の法則

まとめ 2 財モデル

{ Max. : $U = U(x_1, x_2)$ ※Max. = 「～を最大化する」
 { s. t. : $p_1 x_1 + p_2 x_2 = I$ ※s. t. = subject to……「～を条件として、～に服従して」
 { given : p_1, p_2, I ※given = 「～を所与として」
 $\Rightarrow (x_1^*, x_2^*)$

第3節 所得・価格の変化と最適消費計画の変化（比較静学）

1. 所得の変化と効用最大化

(1) 予算制約の変化

・財の価格 p_1, p_2 一定の下で、所得 I のみ変化

⇒所得が増加(減少)すると、予算制約線は右上(左下)に平行シフトする

<図1-8>

(2) 所得消費曲線

＝所得が変化したときの最適消費計画の変化の軌跡

$$\begin{cases} \text{所得} & : I_0 < I_1 < I_2 \\ \text{予算制約線} & : \ell_0 \rightarrow \ell_1 \rightarrow \ell_2 \\ \text{最適消費計画} & : E_0 \rightarrow E_1 \rightarrow E_2 \end{cases}$$

<図1-9>

(3) エンゲル曲線

＝所得の所得に対して財の需要量を対応させる規則(エンゲル関数)を示す曲線

<図 1-10-a ; 第 1 財>

<図 1-10-b ; 第 2 財>

※<図 1-9>に対応して作図

・需要の所得弾力性 e_I (弾力性 ; elasticity)

＝所得 I が 1 % 変化したときに財の需要量 x が何 % 変化するかを表すもの

$$\text{需要の所得弾力性 } e_I = \frac{\frac{\Delta x}{x}}{\frac{\Delta I}{I}} = \frac{\Delta x}{\Delta I} \cdot \frac{I}{x} \quad \text{<式 1-6>}$$

(4) 財の分類

① 上級財 (正常財) ……エンゲル曲線は右上がり

$$\boxed{\text{所得} \uparrow \downarrow \Rightarrow \text{需要量} \uparrow \downarrow} \cdots \cdots e_I > 0 \quad \left\{ \begin{array}{l} e_I > 1 \cdots \cdots \text{奢侈(しゃし)品} \\ e_I < 1 \cdots \cdots \text{必需品} \end{array} \right.$$

② 中立財 (中級財) ……エンゲル曲線は垂直

$$\boxed{\text{所得} \uparrow \downarrow \Rightarrow \text{需要量} \text{不変}} \cdots \cdots e_I = 0$$

③ 下級財 (劣等財) ……エンゲル曲線は右下がり

$$\boxed{\text{所得} \uparrow \downarrow \Rightarrow \text{需要量} \downarrow \uparrow} \cdots \cdots e_I < 0$$

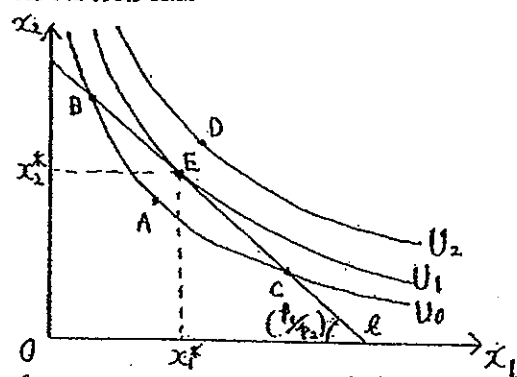
※財の性質を表す概念ではない。

※中立財と下級財は必ず必需品になる。

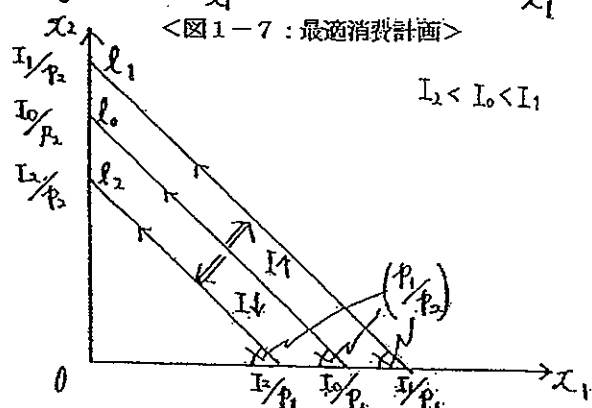
※上級財・中立財・下級財は、無差別曲線の形状(＝消費者の選好)によって決まる。

ベーシック経済学Ⅰ・図表集

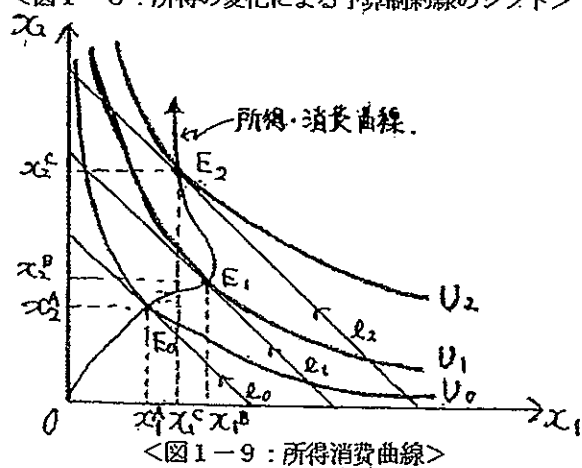
<第1章> 消費者行動理論



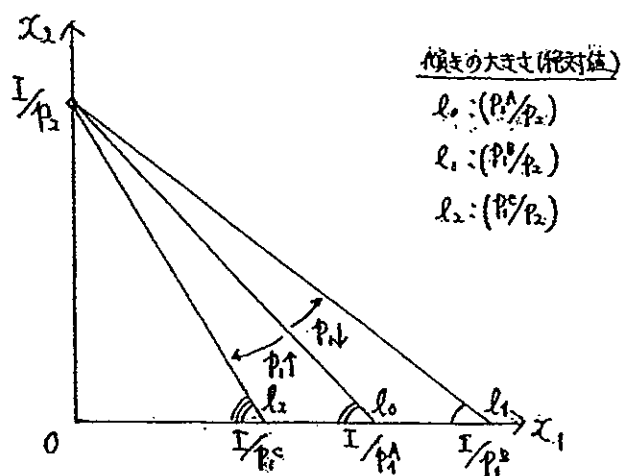
<図1-7：最適消費計画>



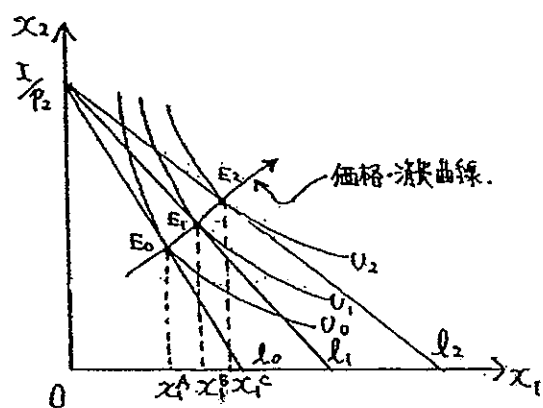
<図1-8：所得の変化による予算制約線のシフト>



<図1-9：所得消費曲線>



<図1-11: 価格の変化による予算制約のシフト>



<図1-12: 価格消費曲線>